

⑥荒澤寺（羽黒山総奥の院）

こうたくじ



明治維新政府の神仏分離を受けて羽黒山内の寺院が破滅される中で、荒澤寺、正善院、黄金堂（庄内札所 1 番）、金剛樹院（庄内札所 2 番）だけが寺院として護持されて来た。

（※）「修験道の精神生活（内藤正敏著）」には、――湯殿山大権現から授かった宝珠から発生した不動明王と地蔵菩薩を祀り、不動の^{ひじ}臂を切って生まれた「火」をいう。

その 1；現在の荒澤寺境内の状況である。 図－2 のとおりで、図－1 において車道から入ると山門があり、それを潜った左手建物は庄内三十三観音首番霊場となっています。同図中央部には「女人禁制」碑（高さ 2.5m～3.0m 位）がある。



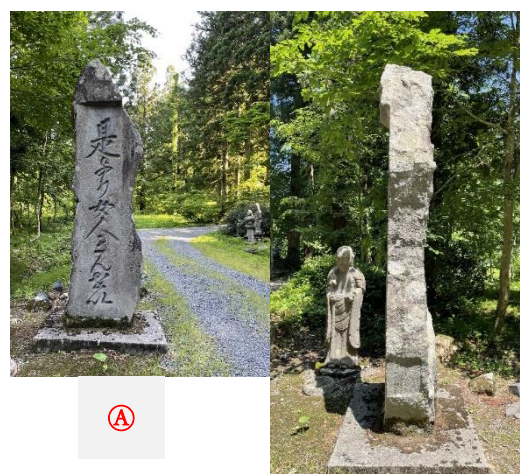
図－2

その 2；女人禁制と女人道

女人禁制碑（図－2）は以前は図－1 ①の所にあった。

図－3 は同じ境内の図－1 ②にあった女人道（女人OK）――「従是羽黒女人道」の石碑である。

また、出羽三山歴史博物館入口入って右側には、図－4 のとおり、^{おわたりみち}「大渡道（吹越側）に建てられていた『女人禁制』の石碑」（1.5m 前後？）が保管されている。隙間に押し込められていて刻字解読は不可であった。場所は図－1 の③の当りの様であった。



図－2

さらに写真は持っていないが、今の荒澤寺と吹越の間④の当りにも図－2 同等大きさの「女人禁制」碑が立っていたという、しかし、今はある宿坊の土台石になっているとの噂話もある。

.....



図-3

図-1における④～⑤の位置については、ある方から聞き取りした中で私が判断したものであり、必ずしも正確とは言えないかもしれないが、いずれにしてもこの界隈には女人道と女人禁制道が交差していたということである。



図-4

その3；

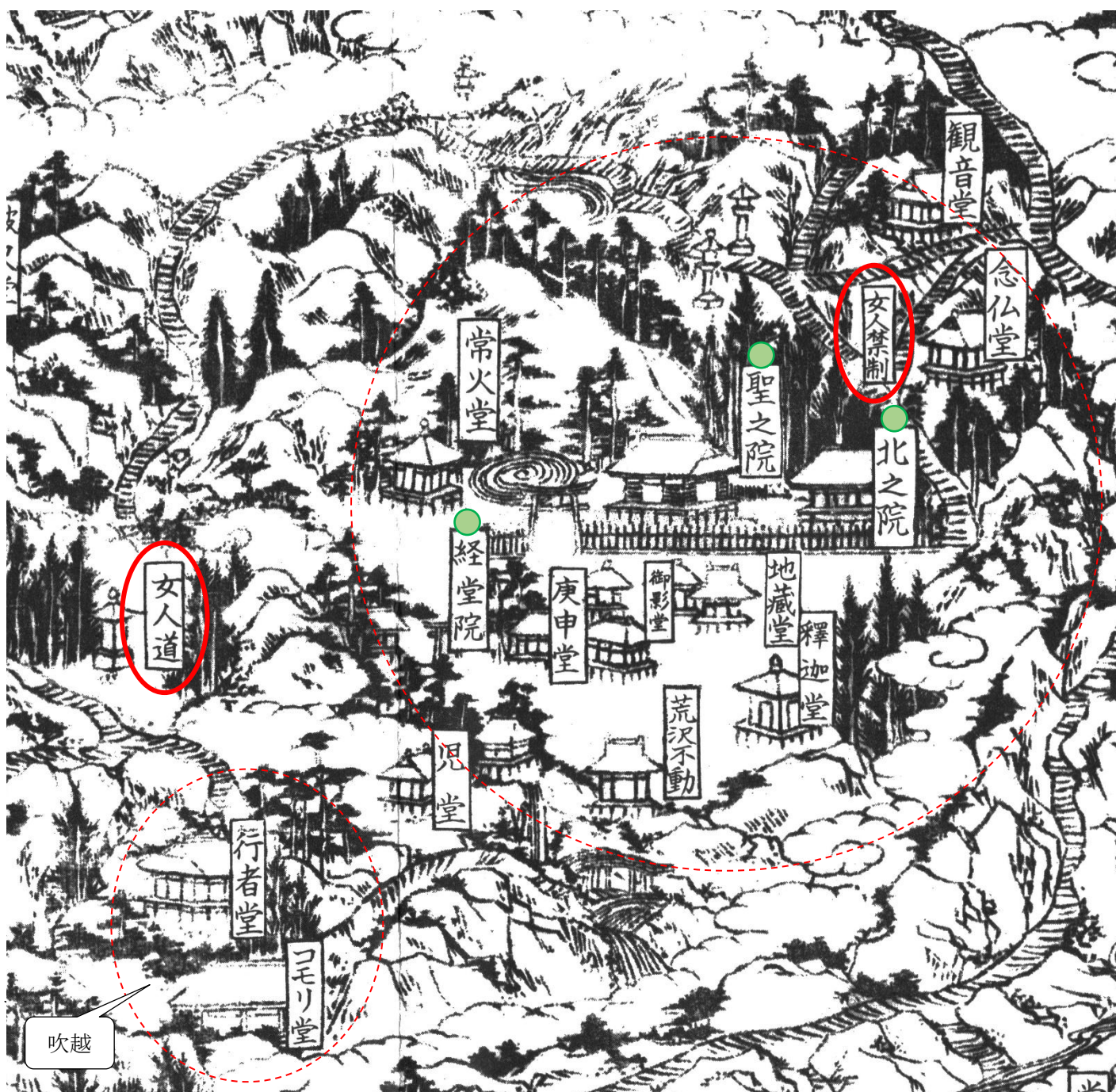
図-5は、境内の内部にある現況建物であり、正善寺の山伏修行道場となっている。



図-5

その4；

図-6は江戸時代の古絵図――岩鼻通明著「出羽三山」によると、三山一枚絵図は3種類存在している、これは嘉永六年（1853）年作成の『湯殿月山羽黒三山一枚絵図』――である、右やや上部が女人禁制の荒澤寺境内であった。右側に「女人禁制」、左端には反対の「女人道」が見える。



図－ 6

羽黒山総奥の院と称する荒澤寺境内は、女性立ち入りを不可・禁足とした嚴重な秘所・聖域としていたということ、そのために、月山に行く道を女人 OK として迂回路を作り、境内の出入り口には女人禁制を表示したということ。

その 5 ；

次に常火堂跡について、現状は後記図－ 7 のとおり。

今のお堂よりも少し大きく昔の建物の礎石が囲むように残っている。特に火を重んじる宗教は修験道である。常火の起こりを簡単に記述すると、始祖の能除太子（蜂子皇子、開山照見大菩薩）が湯殿山大権現から授かった宝珠より生まれた（前者）不動明王と（後者）地蔵尊をご本尊としてここに祀った。太子は勧請したその不動明王の前で護摩焚きを行おうとした処、お不動様自ら剣を抜いて、自分の左臂を切り滴り落ちる血を護摩木に注ぎ猛火を援けたのである。その火を聖火と崇めて、火口^{ほぐち}を守り続けて来たのである。そんな縁起があつて荒澤寺は羽黒山の奥の院と称されるようになったということ。

荒澤寺・正善院においては、前者は荒魂「荒澤大聖不動明王」、後者は和魂「荒澤延命地蔵大菩薩」と称している。両者に共通することとして『水』と『火』に縁がある。全国には様々な水掛地蔵・火除け地蔵や水掛不動尊・日除け不動尊が祀られている。火と水は浄化力を持つ。火は魔力を退治する。水は汚濁を洗濯・洗浄する。火は火力（高熱）で水を蒸発（消滅）させ、水は水力（冷熱）で火を鎮火（消滅）させる。

また、不動明王は金胎^{陽 陰}両部界の首王（最高神）大日如来の化身（仮の姿）と云われている。以上のことから、不動明王は火（陽）神と水（陰）神の両極の神を持つものとして民衆から支持されて来た。



荒澤寺臂切大聖不動明王

図－7

(end)